人名を冠した疾患の話(1) : 高安病, 橋本病, 川崎病をめぐって

板 橋 瑞 夫*

I. はじめに

「80 years of Hashimoto Disease」が1993年 Elsevier から, International Congress Series の1冊として刊行されたことを知った。日本人名を冠する疾患としては, ほかに高安病, 川崎病などが著名である。川崎病については, 最初の患者, 非猩紅熱性落屑症候群の命名などの経緯を記したことがある¹⁾。1965年当時「人名をつけた症候群或は病名をやめよう」²⁾ という提唱があったが, これは医学の学習は経験と記憶に頼ることが大きいので疾患を記憶に頼る場合, 病名と症状に何ら関連もない場合と何らかの関連がある場合とでは学習能率に大きな影響がある。したがって人名を付けた病名を唱えることを避けたいというものであった。これは一理あるものであるが, いわゆる日本人としての日本人名を冠した病名への親しみから, 橋本病, 高安病, そして川崎病について取り上げてみた。

II. 高安病について

1908年, 第12回日本眼科学会においての高安右人の「奇異ナル網膜中心血管ノ変化ノ一例」³⁾ という発表について, 大西および鹿児島によるいずれも「同様の患者で脈の触れなかったことについての経験」という主旨の追加発表があった。すな

わちこの大西の追加発表がこの病気の脈の触れないことを認めた最初である。この高安の発表が甚だ特有な眼症状についてのみ述べ, ほかの部分の記載がないこと, そして大西の追加としての脈のないことがやがて高安病, 高安・大西病と呼ばれ脈無し病への進展となる。高安病の名称は, 1941年新美保三の命名すなわち「本疾患ノ名称ハ從來甚ダ区区デアルガ, イズレモ自己ノ所見ニ準拠シテ名ズケラレテイルガ故ニ新知見ノ得ラレル毎ニ変ワラザルヲ得ナイ状態デアル。ヨッテ私ハ之ヲ止揚シ, 高安氏病ナル名称ヲ与エテ…」⁴⁾ による。その後新しい知見を加えそれらを総合して1948年脈無し病⁵⁾として発表される。この脈無し病の主な三つの徴候として, 1) 脈が触れないこと, 2) 特有な眼症状をもつこと, 3) 頸動脈洞反射亢進, などが基本的な診断の基準となっている。そしてまた血管病変, 部位によって大動脈炎症候群, 大動脈弓症候群とも呼ばれるにいたるのである。この最初の高安病はMeSHでは優先して採用されていた。つまり外国ではこの高安病が病名としては普及していたことになるといえようか。

脈の触れないこととは, 心臓(左心室)から出る大動脈が弓状にまがる部分を大動脈弓部というが, ここからは腕頭動脈, 左総頸動脈, 左鎖骨下動脈が分かれる。腕頭動脈はすぐに右総頸動脈と右鎖骨下動脈とに分かれる。左右の鎖骨下動脈は手のほうへ, そして左右の総頸動脈は頭のほうへそれぞれ分かれていく。これらの動脈の壁に炎症が起こると血管の内側が細くなって血の流れが悪くなる。鎖骨下動脈は手のほうへ, すなわち橈骨

*Mizuo ITABASHI : 〒181 東京都三鷹市牟礼3-11-10.

(1994年6月27日 受理)

動脈と尺骨動脈とに分かれるが、この橈骨動脈の手根部つまり手首で脈拍が触れるのであるが、この脈が触れなくなってしまう。脈がないということになるのである。また頸動脈の流れが悪くなると脳への血行障害によってめまい、失神、頭痛などが起こる。この頸動脈でも正常なら脈は触れる。これらの結果、脈がないことなどを初めとする未知だった所見が、順次解明された臨床所見の総合となって、清水健太郎、佐野圭司の「脈無し病」として報告されるにいたったのである⁶⁾。

MeSH 1994

Takayasu Syndrome see Pulseless Disease

Pulseless Disease

an aortic arch syndrome

93 : was TAKAYASU SYNDROME 1963-92

(see under AORTIC ARCH SYNDROMES

1965-90, see under AORTIC DISEASES 1963-64) ; PULSELESS DISEASE was see

AORTIC ARCH SYNDROMES 1965-92,

was see under AORTIC DISEASES 1963-64

use PULSELESS DISEASE to search

TAKAYASU SYNDROME 1975-92 ; search

AORTIC ARCH SYNDROMES 1966-74

x Arteritis, Takayasu

x Takayasu Arteritis

x Takayasu Syndorome

日本医学会医学用語辞典 英和 1991

Takayasu's disease

高安病, 大動脈炎症候群, 脈なし病, aortitis syndrome, pulselese disease

JICST 科学技術用語シソーラス 1993

高安病

USE 大動脈炎症候群

脈無し病

USE 大動脈炎症候群

大動脈炎症候群

UF 脈無し病

高安病

BT 炎症

・ 病気

大動脈疾患

・ 血管疾患

・・・ 心血管疾患

・・・ 病気

医学中央雑誌 医学用語シソーラス 第3版

高安病

[s 高安動脈炎]

大動脈弓症候群

[s 大動脈炎症候群]

高安右人（タカヤス ミキト）は、1860年7月19日誕生。東京帝国大学医科大学卒業後第四高等中学校教諭，医学部勤務，金沢医学専門学校校長兼教授を経て1923年初代の金沢医科大学の学長に就任。1938年11月20日，直腸癌にて死去⁷⁾。

写真1. 高安 右人

Ⅲ. 橋本病について

1951年、臨床講義、橋本氏病について、弘前大学教授、榎 哲夫講述「Riedel 氏甲状腺腫と言え、大概の諸君は eisenhartes Struma とし、すぐ頭に浮かべることが出来る。然しハシモト氏病或はハシモト氏甲状腺腫と言われても知らぬ人が多いであろう…日本に於ても橋本氏病に就ての報告は少数（凡らくは十指以下）見られるが…戦争前の教科書には殆ど採用されて居ない。実は私も最近迄この疾患を経験したこともなかったし、無関心に過ごしていた。終戦後アメリカの教科書に接する機会が多くなって、時々 Hashimoto の名前で出て来るので、これは誰か日本人でアメリカへ行って研究した人ででもあらうかと深く気にも止めなかった。所が最近正しく橋本氏病である一例に遭遇し…認識を新たにすることが出来たわけである…」⁸⁾

橋本 策（ハシモト ハカル）は、1881年5月5日、三重県に誕生、九州大学医学部を卒業、そして第一外科学教室に入局。在局4年間に教室で摘出された甲状腺を検索して、40歳、45歳、55歳、61歳のいずれも女性の甲状腺腫に、従来の甲状腺

腫にも該当しない特徴を見出し、特にその病理組織像の特性をとって Struma lymphomatosa と名付けた。これを Archiv für klinische Chirurgie 1912 ; 97 : 219 - 48 に発表した。「Zur Kenntniss der lymphomatösen Veränderung der Schilddrüse (Struma lymphomatosa)」がその原著論文である。秋田八年鹿児島大学名誉教授は、この論文について症状と病理所見を詳細に記載し、それまでの既知の甲状腺腫との異同を論じ、その独立性を強調している。そして病因論でそれをあくまで不明として、いろいろな憶測を加えていない点を高く評価しておきたいと述べている^{9, 10)}。

橋本は原著論文発表後1912年2月ドイツに留学、ゲッティンゲン大学の病理学者カウフマン教授に師事したあと第一次世界大戦の勃発により帰国した。やがて生れ故郷の三重県に戻り開業、1934年1月9日患家先で感染したと思われる腸チフスで急逝。52歳であった。1931年、Graham, A は、Riedel's struma in contrast to struma lymphomatosa (Hashimoto) を発表、リンパ性甲状腺腫に（橋本）の名を附加した。これらを契機に外国では、Hashimoto's disease を独立疾患と認める記述が増えていったといわれ、1945年の敗戦前後の例例えば Boyd ; Pathology, Cecil ; Medicine, Christopher ; Surgery, Selye ; Endocrinology などの教科書類には橋本病の記載があったといわれている。一方、わが国では前述のごとく母校九州大学からその後症例の追加、独立性の主張が繰り返されたが、学会の承認を得るにはいたらなかった。

1956年、Witebsky, E.¹¹⁾そして、Rose, N.R.らの動物実験による橋本病の作成、Roitt, I.M.¹²⁻¹⁴⁾そして Doniach, D.らによる橋本病患者血中の自己免疫抗体の発見などにより自己免疫から起こる疾患としての橋本病という認識となっていった。従来の硬い瀰慢性の甲状腺腫という形態学的な病理組織像の橋本病から自己免疫疾患へと究明されていった。自己免疫疾患とは、ある疾患がその個

写真2. 橋本 策

体のなかで生じた免疫反応によって起きてきたものと判断されながら、(1)外から抗原となるべき物質が入り込んだ証拠がなく、(2)その免疫反応がその個体自身の構成因子に向けられたものと判断すべき根拠がある。こうした場合に自己免疫疾患といわれている¹⁶⁾。橋本の特有な甲状腺腫の発見から外国での自己免疫の概念への変容となった。いまや自己免疫現象が証明されれば甲状腺腫の有無に関係なく橋本病と呼ばれるようになっている。

MeSH 1994

Hashimoto's Disease see Thyroiditis, Auto-immune

Thyroiditis, Autoimmune

87 ; was THYROIDITIS, LYMPHOMATOUS 1963-86

use THYROIDITIS, AUTOIMMUNE to search THYROIDITIS, LYMPHOMATOUS 1966-86

x Autoimmune Thyroiditis

x Hashimoto's Disease

x Thyroiditis, Chronic

x Thyroiditis, Lymphocytic

x Thyroiditis, Lymphomatous

日本医学会医学用語辞典 英和 1991

Hashimoto's disease (thyroiditis)

橋本病, 橋本甲状腺腫, chronic thyroiditis, struma lymphomatosa

JICST 科学技術用語シソーラス 1993

橋本病

UF リンパ性甲状腺腫

BT 甲状腺炎

・炎症

・・病気

・甲状腺疾患

・・内分泌疾患

・・・病気

自己免疫病

・免疫病

・・病気

リンパ性甲状腺腫

USE 橋本病

医学中央雑誌 医学用語シソーラス 第3版

甲状腺炎ーリンパ球性

[s 甲状腺炎ー慢性]

[s 自己免疫性甲状腺炎]

[s 橋本病]

[リンパ球性甲状腺炎]

IV. 川崎病について

川崎病についてはすでに川崎富作の最初の患者との出会いから、その最も特徴である猩紅熱様の膜様落屑に着目して、非猩紅熱性落屑症候群と命名したこと。やがて症例を加え50例の臨床的観察としてまとめ、これを急性熱性皮膚粘膜リンパ腺症候群と改めたことなど症候群の命名については、「はじめに」で述べた。この症候群名について1967年6月24日第187回日本小児科学会東京地方会で山本高治郎らが「急性熱性皮膚粘膜リンパ腺症候群の臨床知見について」¹⁶⁾と題して自身の症例23例を発表したが、これは川崎が記載した症候群名を最初にそのまま取り上げた記念すべき第1号であるといわれている。なおこの日の発表の追加として「この新しい症候群は第一線の医者が遭遇しているものでありますし、異なった意見の方もありますので、シンポジウム形式をもって検討したいと思いますので提案します。高津教授宜しくお願いします」「私共の教室にも時々入院してくるが、私共では Stevens-Johnson's syndrome と診断をつけている」というやり取りが記録されているが、この最後の発言によって川崎らの症候群が無視された結果となり提案のシンポジウムの場は閉ざされてしまったということである¹⁷⁾。

川崎病の命名は1968年山本高治郎¹⁸⁾によるとい

われているが、1970年、厚生省医療研究助成補助金による研究班の発足に当たりこの班名についてともかく川崎が命名したこの長い症候群名はなんとかしなくてはということで川崎病という当時の通称名を用いることも考えられたが、本症発見者の川崎自身が強く反対したこともあるし、また川崎市の公害病とでも間違われると同市に迷惑をかけることになるなどを懸念したためMCLS研究班とした。英語では Kawasaki Disease というのがかなり以前から用いられていたが、原因不明の間は Disease ではなく Syndrome と呼ぶべきだということで最近では、Kawasaki Syndrome といった使い方が多いなどとも書かれている。この病名、班名の由縁などについては1986年の重松逸造による¹⁹⁾。また「診断の手引き 改訂4版、1984」では川崎病が国際的に定着したので川崎病を用いるとある。なお、改訂3版(1978)では、日本名が小児急性熱性皮膚粘膜リンパ節症候群、通称川崎病。国際的には Mucocutaneous Lymph Node Syndrome、略称MCLSと記載されている。これらの病名の変遷についての経緯は図書館員の参考になると思う。

MeSH 1994

Kawasaki Disease see Mucocutaneous
Lymph Node Syndrome

Mucocutaneous Lymph Node Syndrome

DF : MLNS

84(77) ; was see under LYMPHATIC DIS-
EASES 1977-83

x Kawasaki Disease

x Lymph Node Syndrome, Mucocutaneous

このうちMLNSについては Pediatrics に発表した A new infantile acute febrile mucocutaneous lymph node syndrome (MLNS) prevailing in Japan (1974 ; 54 : 271) なる標題中

のMLNSであるが、これはこの雑誌の編集者が著者に関係なく付与したものであるという。

日本医学会医学用語辞典 英和 1991

Kawasaki disease

川崎病, 皮膚粘膜リンパ節症候群, 急性熱性皮膚
粘膜リンパ節症候群 mucocutaneous lymph
node syndrome (MCLS)

JICST 科学技術用語シソーラス 1993

川崎病

BT 小児病

・ 病気

医学中央雑誌 医学用語シソーラス 第3版

皮膚粘膜リンパ節症候群

[s MCLS]

[s 川崎病]

病因についてはこれまで溶連菌説, リケッチア様微粒子説, ダニ抗原説, ウイルス説, プロピオニバクテリア説などまことに多彩である²⁰⁾。その原因の解明が急務であることはもとよりである。1970年以来厚生省の研究班によって全国実態調査が行われているが、患者総数は1990年12月末で105,627例に達しており、過去3～4年間隔で全国的流行の経験もあり、また毎年5,000件を超える新しい症例が発生しているわけでもあり、確固たる予防法の発見もまた急務といわれている²¹⁾。

川崎富作(カワサキ トミサク)1925年生。千葉医科大学付属医学専門部卒業。1991年、学士院賞受賞。ますます川崎病であられる。

V. おわりに

たまたまこの川崎病は、ことさらの理由とともあったわけではなかったが比較的初期の頃から個人的に興味をもっていたし、もとより発生時期が在職中であったこともあってその関心を持続させ

ているということにでもなろうか。ほとんど敬称を略させていただきましたことをお断り申し上げる。図書館では人名を冠する疾患の質問は多い。いささかでも対応の手引きになればというのがささやかなる老婆心である。

参考文献

- 1) 板橋瑞夫. 辞書・用語集. 医学図書館 1974; 21(3-4): 169-86.
- 2) 高津忠夫. 人名をつけた症候群或は病名をやめよう. 小児科診療 1965; 34(3): 305-6.
- 3) 高安右人. 奇異ナル網膜中心血管ノ変化ノ一例. 日本眼科学会雑誌 1908; 12: 554-5.
- 4) 新美保三. 高安氏病の一例. 総合眼科雑誌 1941; 35(10): 1404-10.
- 5) 清水健太郎. 佐野圭司. 脈無し病. 臨床外科 1948; 3(10): 337-96.
- 6) 厚美利行. 脈なし病(高安病). からだの科学 1971; 38; 74-7.
- 7) 中島 実. 故高安右人先生. 日本眼科学会雑誌付録, 銀海叢話 1937; 42(11): 65-7.
- 8) 槇 哲夫. 橋本氏病に就て. 医学 1951; 11(4): 240-3.
- 9) 秋田八年. 橋本氏病—その提唱者の面影と概要. 臨床の日本 1957; 3(6): 417-21.
- 10) 秋田八年. 橋本病の創唱者・橋本策のことごと. 内分泌外科 1985; 2(3): 378-82.
- 11) Witebsky E, Rose NR. Studies on organ specificity. 4. Production of rabbit thyroid antibodies in the rabbit. J Immunol 1956; 76: 408-16.
- 12) Roitt IM, Doniach D, Campbell PN, Vaughan Hudson R. Auto-antibodies in Hashimoto's disease (Lymphadenoid goitre) Lancet 1956; 2: 820-1.
- 13) Doniach D, Roitt IM. Autoimmunity in Hashimoto's disease and its implications. J Clin Endocrinol Metab 1957; 17: 1293-304.
- 14) Roitt IM, Doniach D. Human auto-immune thyroiditis: serological studies. Lancet 1958; 2: 1027-33.
- 15) 大谷杉士. 免疫学. 伊勢村寿三他編 現代の生物学; 5 免疫生物学. 東京: 岩波書店, 1966: 201-29.
- 16) 山本高治郎, 大矢達男, 渡辺昭彦, 岩坪哲哉, 金平栄, 石井朗夫. 急性熱性皮膚粘膜リンパ腺症候群の臨床知見について. 小児科診療 1967; 30(10): 1544.
- 17) 川崎富作, 高月 清, 奥村 康. 鼎談 新疾患の発見から概念の樹立まで. Medical Immunology 1986; 12(1): 19-33.
- 18) 山本高治郎, 大矢達男, 渡辺昭彦, 岩坪哲哉, 金平栄, 石井朗夫, 木村順子. 急性熱性皮膚粘膜リンパ腺症候群(川崎)—広義皮膚粘膜眼症候群もしくは多形滲出性紅斑(Stevens-Johnson)の一亜型—の臨床知見について. 小児科臨床 1968; 21(3): 291-7.
- 19) 重松逸造. 病名のこと. 川崎病究明委員会編. 川崎病 疫学データのすべて. 東京: ソフトサイエンス社, 1986; 序文
- 20) 川崎富作, 松田隆志, 直江史郎. 川崎病 Mebio 1985; 2(5): 40-7.
- 21) 川崎富作. 川崎病に関する研究. 学術月報 1992; 24(2): 100-6.